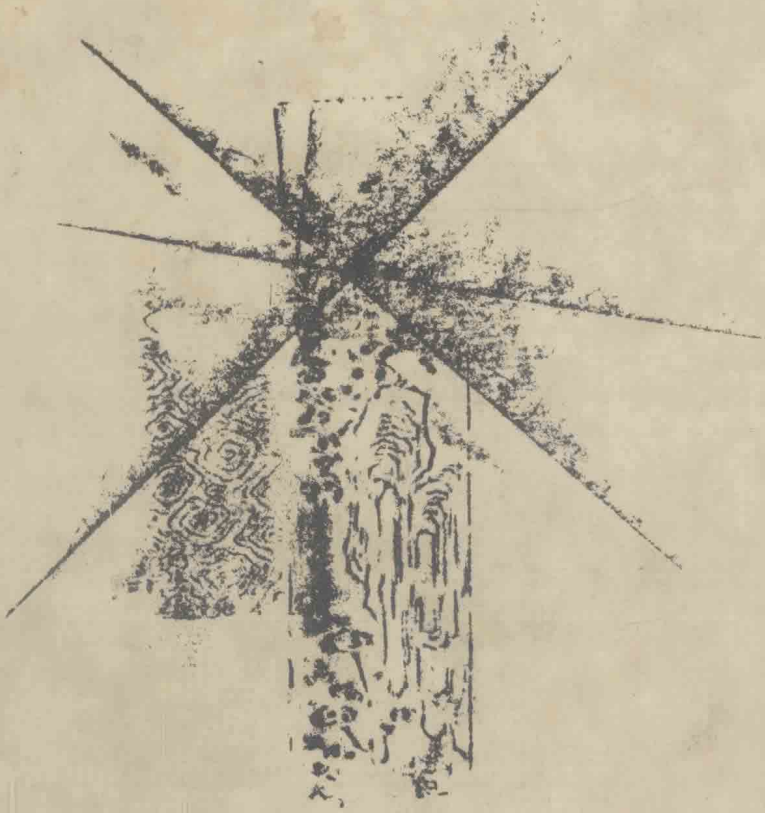

上海の螢

武田泰淳

中央公論社

上海の螢

昭和五十一年十二月二十日初版発行
昭和五十二年一月五日再版発行

著者　武田泰淳
発行者　高梨茂
印刷　三陽社
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二―一
電話（五六一）五九二一
振替東京二―三四
©一九七六　検印廃止

目次

上海の螢　5
汗をかく壁　31
まわる部屋　63
うら口　109

雑種（ツァチュン） 147
廃園 191
歌 225
※
少女と蛇娘 269

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

上海の螢

裝
幀
司
修

上海の螢

一

昭和十九年と二十年とでは、夏は、どちらが暑かったのだろうか。

長崎の港をひそかに離れたわれわれの船は、魚雷攻撃を避けて、島づたいにゆっくりと進んだ。往きつ戻りつ、迂回して航行するので、一日で行けるところが、十日もかかった。食事は極度にきりつめられた。

同室の沖縄人夫婦は、袋からとりだしたサツマイモを輪切りにして、自分たち家族も食べ、私にもくれた。生まのサツマイモは、水気がたっぷりしておいしかった。

みるからに野性的で、精悍な夫妻だった。泣きさわぐ子供のおむつをとりかえたりして、私に迷惑をかけはせぬかと、絶えず気にしていた。

「無事に向うへ着いたら、御馳走しますからね。うるさいけれど我慢して下さい」

上海の税関に勤めているという主人は約束した。

船が黄埔江に入ると、乗客たちは船長に感謝して祝杯をあげた。碼頭(マアトウ)に横づけになった船の上から眺めおろしている私の眼に入ったのは、激しい陽の光に照らされて、白く乾ききった波止場と、何やら声高にわめきながら往来する苦力(クーリー)たちの姿だった。どんな生活が待ちうけているか、少しもわかってはいない。何かしら日本内地とは異なった自由が、そこにあるにちがいなかった。沖縄の男は、倉庫の横側の勝手知った出口から、私を導き出した。「さあ、昼めしを食ってゆきましょう」と、彼は一軒の料理屋に私を案内した。大盛りの焼きそばが、一同の前に運ばれてきた。本物の、柔らかい、油のたっぷりした焼きそばが、私に開放感を与えてくれた。そばの量はおどろくほど多かった。沖縄人はまたたくまに平げてしまったが、私はゆ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

っくりと味わうように食べた。もしかすると上海の暮しは楽しいものになるかな、それとも恐ろしいものになるかな、と、久しぶりの満腹感でうっとりした私は考えていた。いそいでよいのか、それとも、あわててはいけないのか、そんなことは一切不明だった。

ともかく、戦争は今やたけなわだった。というより、末期に近かった。街には一発の銃声も聞えず、あたりには市民のざわめきが充ちひろがっている。

同じ船室にいた小柄の男が、たよりなげに同席していた。彼は新調の背広を身につけていた。しかし、それは、いかにも買いたてといった感じで、体にそぐわなかった。「これから、どこへ行くんですか」と、彼はたずね、私が「知恩院に行くつもりです。上海に別院があるそうですね」と答えると、血色のわるい小男は「それならぼくも同じです。妹が日本租界に住んでいますからね。そこに寄って行くつもりです」と言った。出迎えの者のいない私は、そのたよりない小男と同行した。彼と並んで歩いて行くと、支那家屋とも日本家屋ともつかない家が建ち並んでいた。

それは、たしかに煉瓦積みの中国の民家なのだ。だが、日本人ばかりが出入していた。その一軒に二人が入ると「あら、兄さん。いつ帰ってきたの」と、主婦らしき日本婦人が叫んだ。「この人が行く先がわからないもんで、一寸お連れしたよ」と、彼は主婦に説明した。日本風につくりかえた室内だった。「兄さんときたら、どこで何しているんだか」と、信用のできかねる兄の身の上を気づかうように、主婦は眺めていた。

日本を発つ前から、私は上海の東方文化協会の事務所へ、何回も国際電話をかけた。その度に「只今、お留守らしいんですけれど」と交換嬢が言った。かかったかと思うと、電話はすぐ不通になった。気のせいか、波や風の音が、電話線に打ち寄せているようだった。受話器の中に響く、かすかな物音で、これから就職する事務所の気配を、わずかに聞きとろうとしただけだ。第一、日本語でしゃべったらよいのか、英語で呼びかけたらよいのか、それすら雲をつかむようだった。東京にいる私は、まだ上海語は一言も知らなかった。

この上海の一劃に、どんな様式だかは知らないが、その事務所はあるらしかった。ヒマのありあまっている小男は、まだ私の案内をつづけたいらしい。失敗した商人が遊んでいるんだな、と推察しながら、私は彼と別れて知恩院に赴いた。

白ひげの老僧が、親切に私の話を聞いてくれた。私に代って事務所に電話もしてくれた。しかし、通じなかった。

「それじゃ、行ってみますか。行ってみればわかるでしょう」と、老僧はタクシーをやとって、私と同行して上海の街を走り回った。財政も豊かでないらしい彼が、熱心に私を助けようとしていることは、すまない気がした。「それにしても、事務所の奴らは何をしているんだろう」と、私は怪しんだ。

ガーデンブリッジを通過すると、河沿いにいかめしい建物が建ち並んでいた。西洋風の銀行、商社、官庁、新聞社、ホテルなど、胸をそらせ、肩を合わせて、整列したようにして、城壁のごとく河風をうけていた。それが、いわゆるバンドである。日本人臭い光景は消えて失くなる。そのかわり中国人臭い群衆が、いきなり現れる。

タクシーなど、ほとんど走っていない。電車、バス、それから三輪車（セリンシャ）、客を乗せたのも、乗せないのも、前や後を横ぎったり、追いぬいたり、いまにもぶつかりそうにすれちがったりして、ひたすら進んでいる。喧噪は高まったり低まったりして、ときどき北京語とはちがった妙な中国語が聞える。その声は、みんな怒鳴るような、投げやりな発音だ。人波を離れ、雑踏から遠ざかるにつれ、租界が近くなる。共同租界、イギリス租界、フランス租界、それらの租界のうち、どのあたりを走っているものやら、私にはわからない。

ヨーロッパ風の明るさ、ヨーロッパ風の色彩、ヨーロッパ風の街並みと人影が眼前に現れる。東京の銀座街とも、外人の多い横浜の街とも、それは異なっている。そこには、しっかりと白人の勢力がくいこんでいる。中国に渡ったはずの私は、もう一つ別の、異国の街に入りこんでいるらしい。瀟洒な商店街に並木がつづいている。アルベール路、霞飛路（カヒロ）、法租界（ファッカ）その他、ヨーロッパ風の地名を上海語で発音する、漢字とローマ字が入りまじった地帯のどこかに、私の行くべき事務所は隠れて

しまっている。どう探してもわかりそうにない。

「どうですか。事務所がわからなければ、どなたか責任者の私宅の方に行ってみては」と、老僧が注意した。

私は幸いに、東方文化協会の理事長の住む家の所番地を記した紙片を所持していた。それを見た老僧は、何やら上海語で行く先を運転手に告げたらしい。何度も折れまがって、道は次第に閑静な住宅区に導いてゆく。老僧は、精神を集中して、白ペンキで明示してある番号を、次々と見てゆく。「あッ。ありました。ここですよ」と、彼は叫んだ。私は車を降りて門柱のベルを押した。煉瓦の塀で囲まれた邸はひっそりとしている。やがて一人の中国婦人が近寄ってきて、柵の間から私たちをのぞいた。「小田先生はいらっしゃいますか」と、教科書で覚えたとおりの北京語で私は問いかけた。彼女は愛想よく笑って「小田先生、没有」と、上海語で答えて、首をゆっくりと横にふった。引き返すより仕方がない。一体、どこへ引き返したらいいのか。

老僧がいらだっていることが、私には感ぜられた。
「さっき、西洋菓子のような奇妙な建物の前を通り過ぎましたね。あの辺で降して下さい。どうも、ありがとうございました」
老僧を返して、私はひとりぼっちになる。
並木の柳が風になびいている。西も東もわからぬまま、私は清潔な歩道を歩いて行く。すると「東方文化協会」と墨文字で書かれた看板がぶらさがっていた。
それは、異様に豪華な、お伽噺にでも出てきそうな建物だった。ついに発見できたという喜びよりも何よりも、これがぼくの赴任する事務所なのかしら、本当にそうなのかな、という驚きで、私は半ば夢見心地だった。いつか必ず、一生に一度は、こんな不思議な建物に自分が巡り合うという、私の夢想が現実の形となって、私の眼の前にあった。
化粧煉瓦で積まれた建物の外郭が、ぜいたくを極めていたばかりでなく、内部の細部の造りが、凝りに凝っていた。磨きあげられた木製の階段を、私はのぼった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c